

NEWS LETTER

Vol.2

学術変革領域研究（A）

『貧困学の確立—分断を超えて』

～後編に向けて～

「貧困学の確立」を担ってくださっているみなさま、

本プロジェクトも早くも4年目となり、後半2年間を残すのみとなりました。プロジェクトの最初のころに描いた学術の壁を越えた「貧困学」にどこまで近づけたのか、この問いは、残りの2年間、それからしばらくたたないと本当のところはわからないのではと思っています。でも一つ言えるのは、このプロジェクトを通して、本当にさまざまな分野の研究者の方とお知り合いになれたこと、そして、多くの方々が、貧困問題について何かしなくてはという強い意志を共有してくださっていることを知れたことは、日本の貧困研究にとって、そして私個人にとっても大きな財産です。

このニュースレターを手にとってくださる皆様の中には、これまで本プロジェクトに思う存分関われなかったという方も多いでしょう。日本の学会コミュニティの現状として、中堅以上の研究者は多忙を極めており、じっくりと研究する時間はごくわずかですので、それは当たり前のことです。若手に期待すると言っても、そんなに若手研究者がいるわけでもありません。だからこそ、このプロジェクトは、誰でも、どんなにかかわり方でも、Welcome！貧困に対する理解を少しでも深め、貧困学を進めることで、貧困に苦しむ人々を将来少しでも少なくしたい、その気持ちがあるあなたが、いま、そこにいらっしゃる・・・それでだけで十分なのです。プロジェクトはあと2年。2年終わった時に、振り返れば、そこに、たくさんの人々の顔がある・・・その日を待ち遠しく、領域代表として、これからも尽力してまいります。

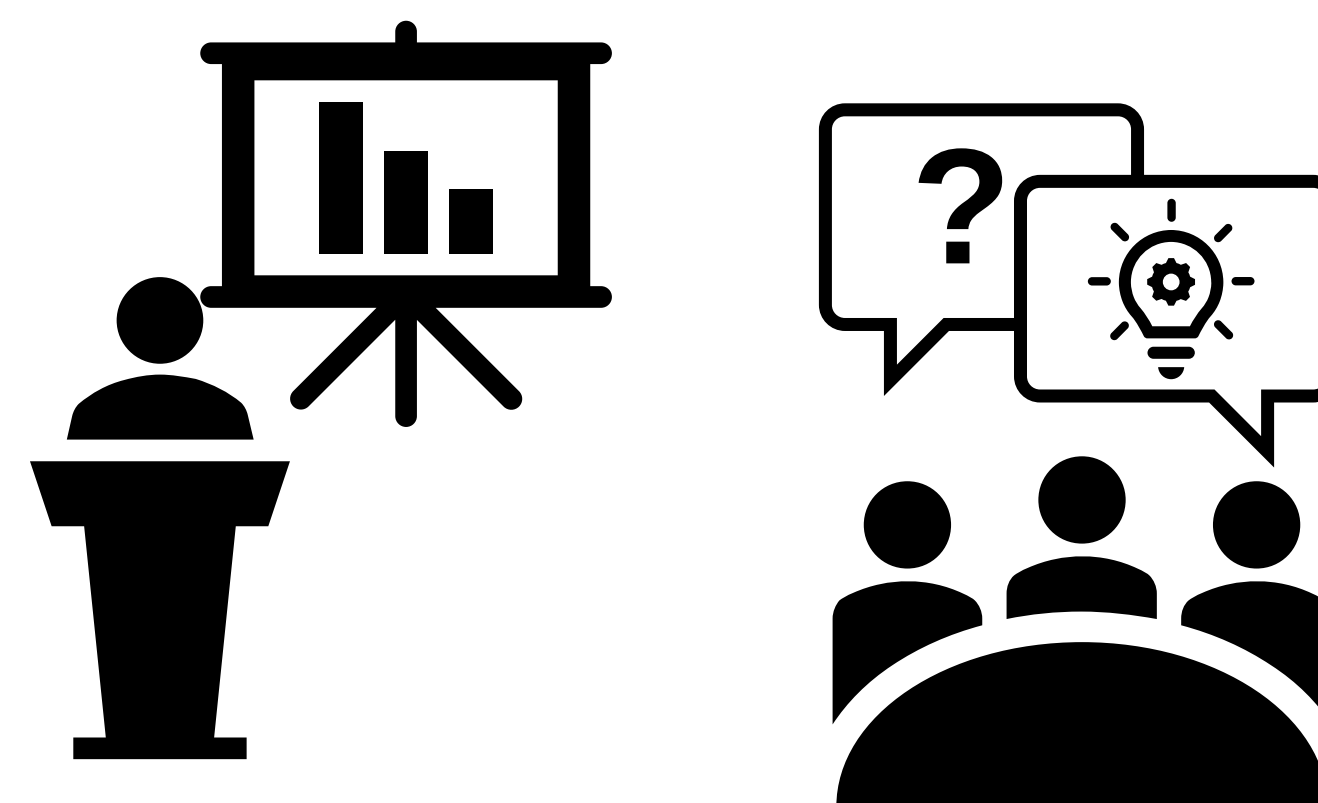


阿部 彩



データ・ドリブン Data Drivenな研究推進

隔月の領域研究会を設けることにより、計画研究班間の綿密な意思疎通、共通理解の醸成を促します。



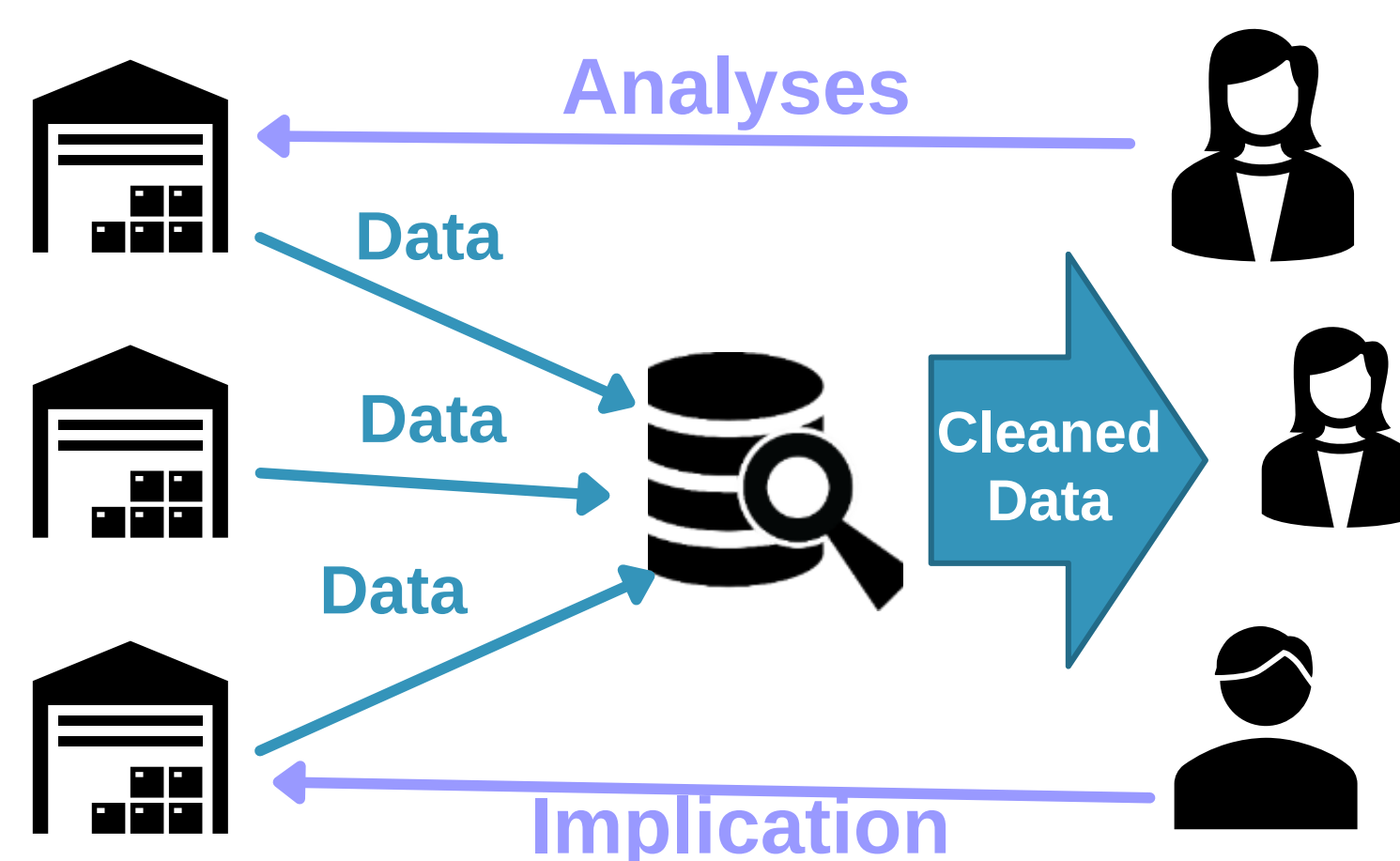
若手研究者の育成

若手研究者の育成は、①分担研究者、②公募研究、③院生雇用の3つの方法からなります。

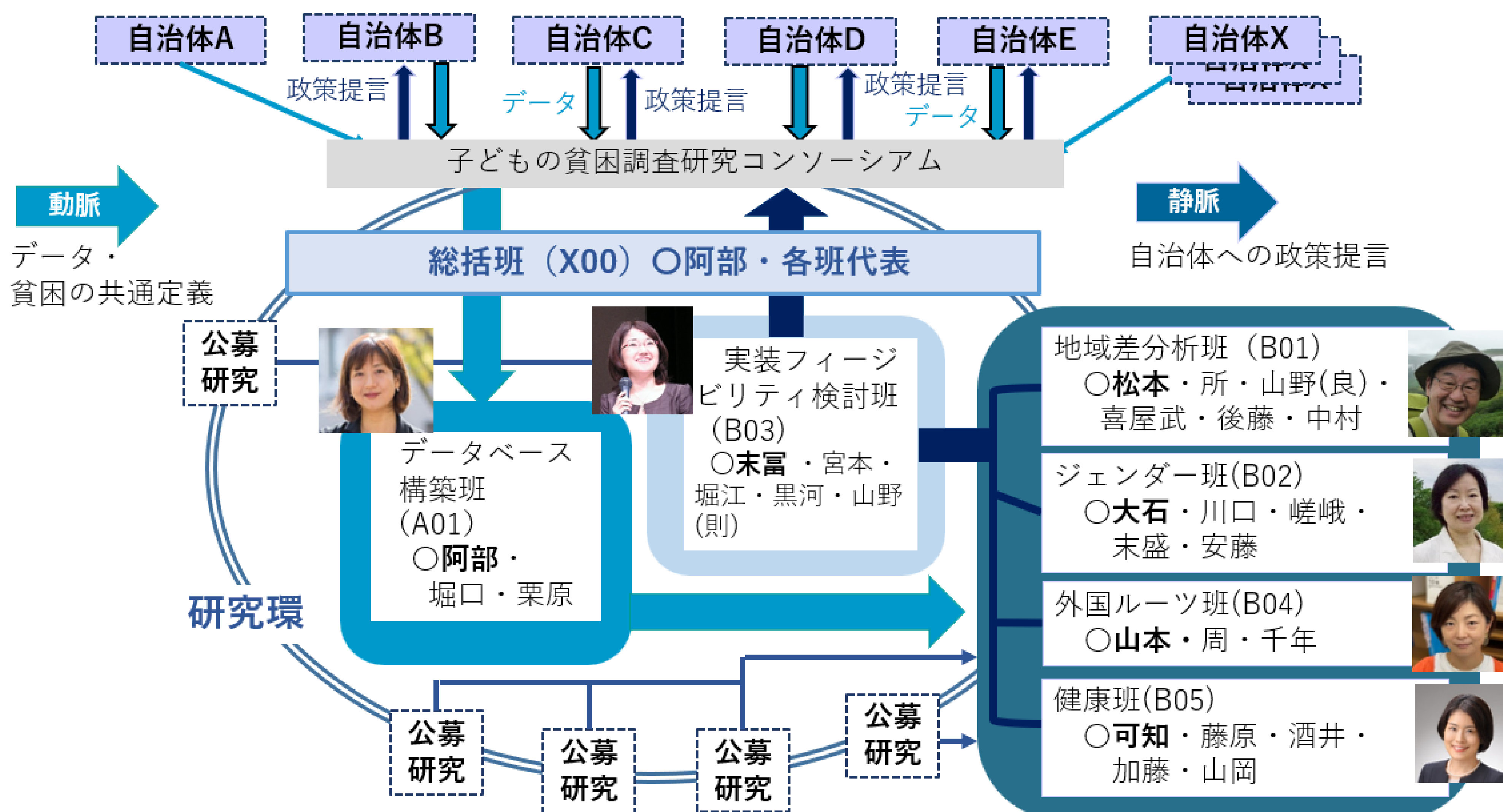
若手研究者を積極的に雇用し、データ処理やデータベース・マネジメントをon-the-jobで学びながら生活費の一部を稼ぐことができるようにします。

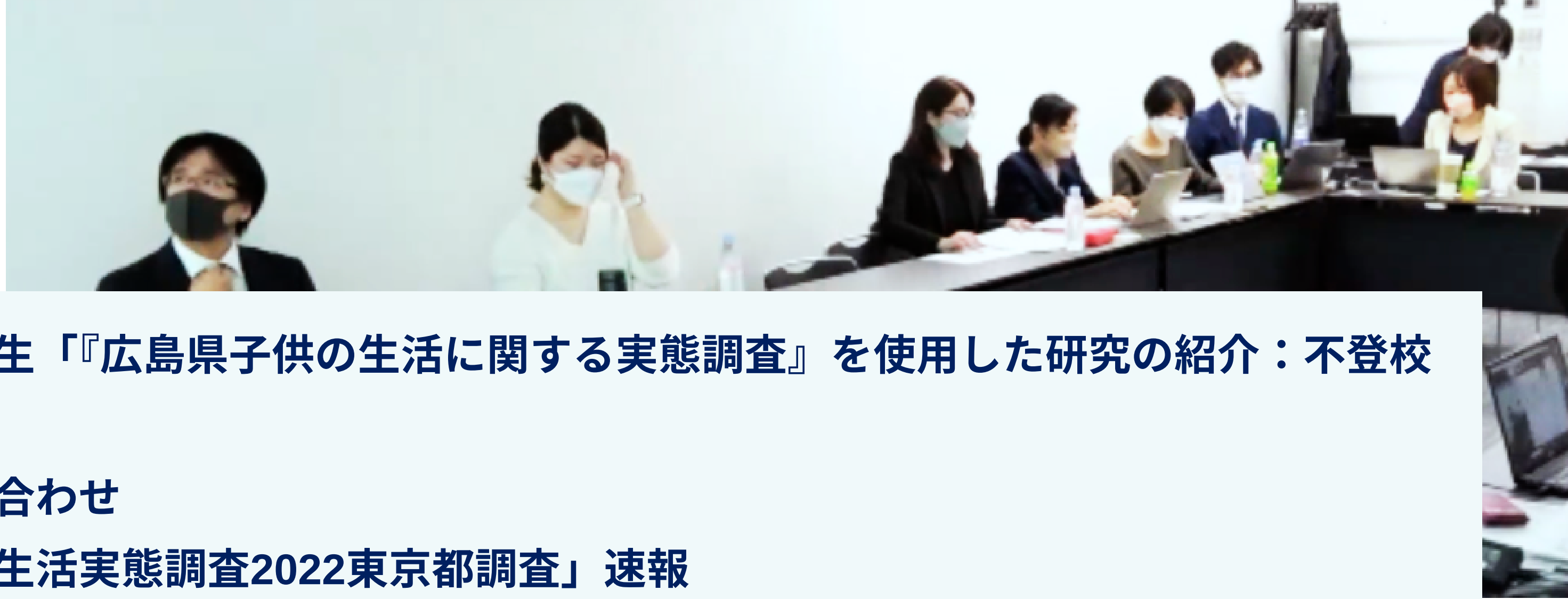
自治体との協働による政策の実装

世論・政治・財源・行政をどのように動かすのかを検討する実装フィージビリティ検討班(B03)を設け、それらを踏まえて、データを提供した自治体についてはオーダーメイドの政策提言のフィードバックを行います。



プロジェクト組織図





- 第1回（2023.2.27）▶ 梶原豪人先生「『広島県子供の生活に関する実態調査』を使用した研究の紹介：不登校に着目して」
- 第2回（2023.4.27）▶ 公募研究顔合わせ
- 第3回（2023.6.22）▶ 「子どもの生活実態調査2022東京都調査」速報
- 第4回（2023.8.26）▶ ジェンダー班 川口遼先生・安藤藍先生「マルトリートメントとジェンダー：子どもと保護者の性別の組み合わせに注目して」、他（年次総会）
- 第5回（2024.2.26）▶ 実装フィージビリティ検討班の活動報告：末富芳先生「援助に値する『子どもの貧困』—2023ビネット調査の分析—」
- 第6回（2024.4.22）▶ 公募研究報告①：加藤承彦先生・山岡祐衣先生・Yu Par Khin先生
- 第7回（2024.6.21）▶ 公募研究報告②：高岸治人先生
- 第8回（2024.8.6）▶ 公募研究報告③：井出智博先生・大澤亜里先生・片桐諒子先生・加藤弘通先生のご報告
- 第9回（2024.10.30）▶ 公募研究報告④：小澤浩明先生・孫詩彧先生・丸山里美先生
- 第10回（2024.12.18）▶ 公募研究報告⑤：片岡先生・喜屋武先生・日吉先生・永吉先生

「2022年度東京都子どもの生活実態調査」を実施しました

本調査は、東京都の子どもの生活困難の実態、意識を明らかにし、貧困政策のエビデンスとするために実施されました。調査の実施にあたっては、東京都中野区、墨田区、豊島区の協力を得ています。

詳細は以下の通り：

調査対象者：

墨田区・豊島区の公立小中学校に在籍する小学5年生と中学2年生（全数）とその保護者、および、豊島区・墨田区・中野区在住の16～17歳（高校2年生）年齢の子ども（全数、住民基本台帳から抽出）とその保護者（計10,355親子ペア）

調査方法：

小学5年生・中学2年生は学校配布・郵送回収（Web回答も併用）

16～17歳は郵送配布・郵送回収（Web回答も併用）

調査期間：

令和5年1月23日～令和5年2月13日

結果の概要はこちら：

<https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/r4-survey/>



地域差分析班（B01班）

地域班は「子どもの貧困と地域特性の関連の研究」を主題としています。参加メンバーは、それぞれの地域で「子どもの生活実態調査」を主導した研究者です。2022年度は、それぞれの地域の調査結果を比較検討するためのデータ整理作業を行いました。2023年度は研究班代表者の健康上の理由により、班としての活動がやや停滞しました。2024年度はオンラインで2回の研究会、対面では札幌市において1回の研究会を開催しました。研究会では、それぞれの地域の貧困と生活に関わる調査の動向を報告し、班としての今後の調査のあり方について議論を進めているところです。3月には大阪で、地域のエクスカージョンを含む研究会を開催し、2025年度の調査実施に向けて議論を詰めていく見込みです。



ジェンダー班（B02班）

この班では、子どもの生育環境におけるジェンダー差や貧困の影響、世帯タイプの違いが子どものウェルビーイングに与える影響を分析することを目的としています。

2022年度は、研究班の立ち上げとして2回の研究会を開催し、性自認の統計的な捉え方や家庭内の貧困と資源配分について、講演と意見交換を実施しました。また、研究成果を学会で報告し、公開ワークショップも開催しました。

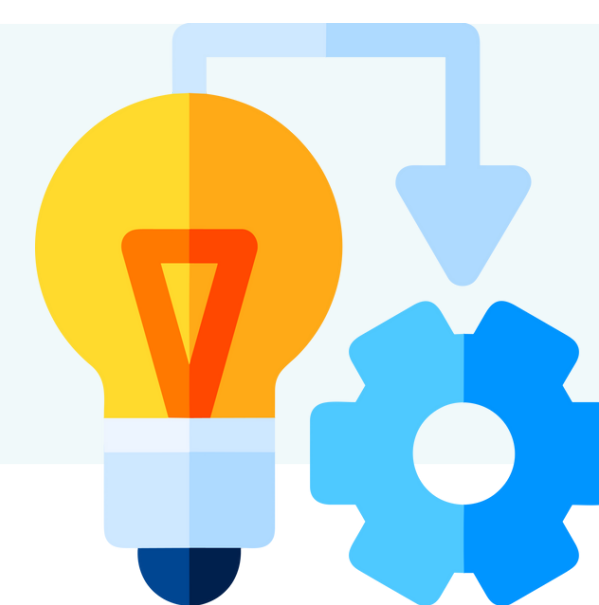
2023年度は、公募研究者を交えた合同研究会を定期的に行い、研究交流を進めました。主な成果として、①子どものマルトリートメントの発生背景や性別による違いの分析、②世帯内の資源配分のジェンダー差の分析、③親の働き方と子どもの健康アウトカムの関係の分析、④シングルマザー世帯の養育費受給状況と教育期待の関係の分析を行い、各学会やシンポジウムで発表しました。2024年3月には、労働政策フォーラムで時間の貧困を含む貧困のジェンダー差について議論しました。

2024年度は、これまでの研究成果をさらに発展させ、学会や国際フォーラムでの報告を予定しており、Springerからの書籍刊行に向けた論文執筆を進めています。



実装フイージビリティ検討班（B03班）

この研究班は、教育政策やこども政策の社会実装を目指して、ビネット調査、国会議員調査、報道関係者調査を中心に実証的な研究を進めています。各調査では設計から分析までを丁寧に行い、国民意識や政策決定の現場、報道の役割を明らかにしています。得られた成果は、学会発表や論文化、公開研究会などを通じて広く発信しています。また、こども大綱の分析や指標改善の提案、こどもの参画や意見表明の手法にも取り組み、実践的な政策提言につなげています。



研究班のご紹介

外国ルーツ班（B04班）



本研究班の2024年度の研究は、2024年1月に実施した大規模調査を分析することを中心に進めました。オンライン会議およびメールでのやりとりを繰り返し、調査結果の分析を進めました。2024年11月には、130ページを超える報告書としてまとめ、本領域研究の公式ウェブサイト上で公表することができました。

- ・「外国ルーツ子育て世帯の仕事、育児と暮らし—外国ルーツ子育て世帯調査 2024年度（外国籍を含む子育て世帯の生活状況に関する調査報告書）」

本研究班が独自に行った調査データの分析と並行して、領域共通で利用している既存の統合データの分析も進めてきました。2024年度には、以下の3本の論文を発表することができました。

- ・山本直子, 千年よしみ（2024年8月）「外国ルーツの世帯の教育費負担—首都圏の『子どもの生活実態調査』の分析から—」『貧困研究 第32号』pp80-90.
- ・山本直子（2025年3月掲載予定）「子どもの貧困対策としての公共図書館の可能性—都内の『子どもの生活実態調査』から—」『人文・社会科学論集第42号』ページ数未定.
- ・山本直子（2025年3月掲載予定）「外国にルーツを持つ子どもたちの権利と支援の再考」—必要なセーフティネットを利用できていない世帯に着目して—」『社会保障研究 第35号特集号』ページ数未定.

これらの研究成果により、外国ルーツの世帯には、教育費をはじめ、一般的な世帯とは異なる側面での負担が存在することや、公的制度や公共施設の利用が子どもの貧困対策としてどのように影響をおよぼすのか、といった新たな視点を共有することができました。

2024年12月には対面で研究会を行い、以上の成果をもとに、2025年度の研究の進め方について議論しました。2025年度には、独自の調査から得られたデータおよび既存の統合データを用いて、さらに詳細の分析を進め、論文化していく予定です。

健康班（B05班）



健康班では、主に『子どもの生活実態調査』のデータを用いて、「子どもや親の状況が子どもの健康にどのような影響を与えているのか？」を分析しています。これまで、4篇の英文論文が国際学術誌に、1篇の和文論文が国内学術誌に掲載されています（下記、参照）。また、現在5つの研究課題に関して、データ分析または論文執筆を進めています。

データ分析を通じて知見を集積すると同時に、「これまでのおよびこれから蓄積する知見をどのように社会に還元していくか？」を健康班全体で考え、子どもの健康に関する政策提言に繋げていきたいと考えています。政策提言（アドボカシー）に関する理解を深めるために、今年度、下記の4名の方をゲスト講師として招待しました。これらのセミナー動画は、学術変革領域AのHPのメンバー専用サイトに格納しておりますので、視聴をご希望される方はご相談ください。

吉田美樹 先生（株式会社オシンテック）／森脇大輔 先生（株式会社サイバーエージェント）／
栗田駿一郎 先生（日本医療政策機構）／金子知史 様（日本財団）

マイナー班のご紹介

本PJでは各計画班の中に、さらに小さい個別トピックのグループで活動を行っています。



栄養グループ

厚生労働省「国民健康・栄養調査」と「国民生活基礎調査」の個票を用いて、栄養格差と働き方、家族形態、SESとの関連、その時系列変化などを分析しています。

member

喜屋武ゆりか
(沖縄大学)

堀川千尋
(新潟大学)

片桐諒子
(国立健康・
栄養研究所)

阿部彩
(東京都立大学)

モデルファミリー分析チーム

モデル・ファミリー・アプローチという手法を用いて、家族タイプごとの現金給付およびサービス給付の違いを分析するほか、貧困対策、家族政策の国際比較を行っています。東アジアの6カ国から現在は全世界の国々に広がっています。

member

Dr. Julia Wang
(国立台湾大学)
他
国際チーム

チャイ・ブンシュワ
(東京都立大学)

阿部彩
(東京都立大学)



事務局からのお便り

この間、同郷の友達が
焼いた魚を食べたとき、
僕が「これサーモン？」
と聞いたら、
「いやいやこれ鮭」と
答えられました…
by ZHAI



みんな優しく、
和気あいあいと日々
研究しています！
by 荻原



学変も博士課程も
もう4年目か…
by 近藤



新任の渡邊綾です。
よろしくお願いします。
by 渡邊



HPの研究会の動画アー
カイブ、意外と見てくだ
さっていて嬉しいです！
by 三浦



研究業績のご紹介

学術論文

国内

- 阿部彩（印刷中）「日本における子どもの社会的必需品（Socially Perceived Necessities）の分析」『社会政策』16(4)
- 安明希・鈴木修斗・加藤弘通(2024)「貧困と子どもの抑うつ調整要因：子どもの「暮らし向きの認知」の性差に注目して」『子ども発達臨床研究』19: 175-186.
- 後藤澄江(2024)「フォスタリングの普及啓発や人材育成に関する実態や課題ー里親等委託率の向上と子どもの権利擁護を同時に実現するためにー」『新情報』112, 新情報センター.
- 日吉和子, 山中知子, 錦織史子, 安發明子(2024)「子どもの命を守る日本のユースクリニック〜フランスのユースクリニック調査を基に〜」地域保健Web. 2024.10.
- 梶原豪人(2024)「子どもの所有物の欠如といじめ被害の関連に関する実証分析」『社会政策』16(1), pp.252-263.
- 松本伊智朗(2022)「なぜ、どのように、子どもの貧困を問題にするか」『学校ソーシャルワーク研究』17: 2-15.
- 内藤朋枝(2024)「子どもの生活と不登校リスク」『アジア太平洋研究』48
- 佐藤奈月・Hou Yuejiang・加藤弘通・松本伊智朗(2022)「思春期・若年期女性の自立をめぐる困難：札幌市若年女性調査を通して」『生活指導研究』39: 21-32.
- 孫詩彥(2024)「家族の見えないリスク：ジェンダーと貧困の観点から」『教育福祉研究』43-44.
- 末盛慶・小平英志・鈴木佳代(2023)「シングルマザーの家族生活と仕事生活に関する生活戦略ー計量的分析による検討ー」『日本福祉大学社会福祉論集』(148): 1-18.
- 山本直子・千年よしみ(2024)「外国ルーツの世帯の教育費負担ー首都圏の「子どもの生活実態調査」の分析からー」『貧困研究』32: 80-90.
- 山野良一（2022）「貧困と孤立の交差点で、子育て家族に"つながる"一手を考える」『こころの科学』（224）: 20-25.
- 山野良一（2023）「ヤングケアラーと貧困：沖縄子ども調査(高校生調査)から見える点」『ヒューマンライツ』（429）: 34-38.

海外

- Abe, A. (2024) “Are we getting closer to consensus?: Empirical Study using population-based survey in Japan over 20 years” Social Indicators Research 175: 247-268. DOI: 10.1007/s11205-024-03418-4
- Hanafusa, M., Nawa,N. Owusu, F., et al., (2024) Do the norms of tolerance for child physical abuse modify the intergenerational transmission of physical abuse? Child Abuse & Neglect, 159: 107156.
- Matsunaga, M., Ohtsubo, Y., Ishii, K., Tsuboi, H., Suzuki, K., & Takagishi, H. (2023). Association between internet addiction, brain structure, and social capital in adolescents. Social Neuroscience, 18(6), 355-364.
- Sakai, A., Murohashi, H., & Watanabe, S. (2024) Mother-Adolescent Relationship and Psychological Distress During the COVID-19 Pandemic: A Longitudinal Study. Journal of Adolescence.
- Yu Park, et al. (in production) Association between elementary and middle school children with mixed/foreign roots and influenza vaccination in Japan” , Pediatrics International. DOI: 10.1111/ped.15851

学会報告

国内

- 千年よしみ(2023)「外国ルーツの子どもと家族の多様性ー生活困難と親の就労ー」第128回労働政策フォーラム 外国にルーツを持つ世帯の子育てと労働を考える
- 梶原豪人(2024)「自治体によるフリースクール利用料補助施策の計量的実証分析」日本教育社会学会第76回大会
- 喜屋武ゆりか(2024)「沖縄の高校生における世帯の貧困と食生活の関連（横断研究）」日本学校保健学会学術大会
- 小澤浩明、栗原和樹、前馬優策、松田洋介、三浦芳恵、山田哲也(2024)「大規模公営団地における低所得層家族の生活と教育戦略のその後ー継続インタビュー調査の分析ー」日本教育社会学会第76回大会
- 永吉真子(2024)「親の雇用形態と、同居の子どものこころの健康状態との関連：国民生活基礎調査より」第83回日本公衆衛生学会総会
- 内藤朋枝(2024)「ワークならびにライフの両面が母親にもたらす負担感と家庭環境」社会政策学会第149回（2024年度秋季）大会
- 山野良一（2023）「子どもの貧困を考える：沖縄子ども調査から」九州教育学会大会公開シンポジウム

海外

- Abe, Aya (2024) “Are we getting closer to consensus?, “ Bristol Poverty Institute Poverty and Social Justice in a Post-COVID World Symposium.
- Hiyoshi K, Watson D, Ikeda Y, Nakano K, Araki T, Vialatte FB. (2023) Youth Clinic to Support the Health of Young People in Japan: A Decisive Response to a Developing Human, Social, and Financial Crisis. The FIGO World Congress, Paris.
- Matsubara, A. and Aya, A. (2024)” Association between neighborhood association activities and psychological well-being of children,” Foundation for International Research on Social Security (FISS) the 30th International Conference/East Asia Social Policy Network the 20th International Conference, International Kyoto Conference Center.
- Kato, H., Ota, M., & Shu, Y. (2023).Is child poverty a cause of school bullying? 44th Annual Conference of the International School Psychology Association in Bologna, 8th July.
- 孫詩彥「在日外国人子育て家族の暮らし：不安定な住まいから見えてきた現実」東アジア研究者協議会第8回国際学術大会、中国・台湾・淡江大学、2024(査読・招待あり)

これまでのイベント

INTERNATIONAL

国際学会の主催&シンポジウムの開催

2024年6月、京都で第30回FISS(Foundation for International Studies on Social Security)会議と第20回EASP (East Asian Social Policy Network)会議が合同開催され、世界各国から343名の研究者や学生が参加され、158件の口頭発表や103件のポスターセッションが行われました。会場は京都市郊外の京都国際会館で、美しい公園に囲まれ、湖を見渡すロケーションを楽しみながらゆったりと会議が行われました。

本PJはこの会議の主催として活動し、2つのパネル・セッションを開催しました。一つはHow does Japan cope with super-aged society、二つ目は、Interrogating the Diverse World of Welfare in East Asian Societiesで、東アジアモデルファミリー分析チームの成果、また研究成果の個人報告を行いました。



WORKSHOP

「ジェンダー視点を取り入れた子どもの貧困研究」ワークショップ(2023.3.3.)

本領域研究の大石亜希子先生（千葉大学大学院）が研究代表を務める[B02班：ジェンダー班]が、ワークショップを開催しました。

本プロジェクトでは、これまでの子どもの貧困研究においても無視されがちであったジェンダー差に着目し、研究を進めており、このワークショップでは、研究初年度の分析内容を報告・議論しました。

FORUM

第128回労働政策フォーラム

「外国にルーツを持つ世帯の子育てと労働を考える」(2023.10.13-19.)

日本に暮らす外国人は300万人を超え、日本に定住して子どもを産み育てる人々が増えています。移住してきた外国籍の人々の非正規雇用の割合は高く、移住第一世代が労働市場において直面する問題は依然として多くあります。本フォーラムでは、外国にルーツを持つ世帯が置かれた環境を概観し、支援現場の報告を交えながら、課題や支援のあり方について様々な視点から議論します。

イベント予告

学変(A)領域研究会および子どもの貧困研究のフロンティア定例学術研究会を定期的で開催しております。開催予定については、メーリングリストによるご連絡やHPをご覧ください。

AWARD

日本子ども学会でのポスター発表で最優秀発表賞を受賞！

本領域研究B05健康班の酒井厚先生（東京都立大学）と領域代表の阿部彩先生（東京都立大学）が、「第20回子ども学会議(9月21日・22日)」でのポスター発表で、『最優秀発表賞』を受賞しました！

方法

子ども自身の経済状況評価として、はく奪されている物(同年代の多くは持っている“必需品”)の欲求に注目。サードプレイスは無料で過ごせる「児童館」「公園」「図書館」「商店街・ショッピングモール」の利用や支援制度。

- 参加者：2016年から2019年にかけて東京都内(墨田区、豊島区、世田谷区、中野区、調布市、日野市、狛江市)で実施した調査(住民基本台帳から抽出した悉皆調査、郵送法)に参加した小学5年生・中学2年生の子どもがいる家庭。今回は使用する変数すべてに回答した6,789家庭のデータを使用

- 調査内容：(親は親評価)

- ・家庭の経済状況：家庭一人あたりの所得、家計の逼迫度(親)、子どもによるはく奪物への欲求(Table 1)：項目ごとに、なくて欲しいを1、あるまたはなくて欲しくないを0として合算
- ・友人関係の質：友人関係の良好さ3項目(Kid-KINDL, 古荘他,2014, 4件法, $\alpha=.74$)と自己開示1項目(4件法)の合算
- ・平日・休日に過ごす場所：自宅、友人宅、サードプレイス各所において1週間で平日の放課後に過ごす日数(毎日：3〜全く過ごさない：0)と休日に過ごす場所の有無(あれば1、なければ0)
- ・平日・休日に過ごす人：平日の放課後と休日それぞれで一緒に過ごすことが一番多い人を選択。両日で選択されれば各1、なければ0として合算
- ・子ども支援制度の利用(親)：子育てひろばや子ども食堂など6つの制度の利用経験の有無。各項目あれば1、なければ0として合算
- ・子どもの自尊感情：阿部・埋橋・矢野(2014)が作成した自己肯定感尺度、「自分は価値のある人間だと思う」など6項目(5件法, $\alpha=.83$)

Table 1 はく奪物に関する項目と欲求の有無(値は項目ごとの%, 各列左側は小5, 右側が中2)

	ある	欲しい	欲しくない
自分だけの本(教科書・マンガ除)	88.2 / 90.6	5.6 / 2.7	6.2 / 6.7
子ども部屋(きょうだいと共有あり)	72.7 / 81.2	21.3 / 14.4	6.0 / 4.4
自宅インターネットにつながるパソコン	68.8 / 79.2	16.6 / 13.5	14.6 / 7.3
自宅で宿題をすることが出来る場所	95.9 / 96.7	2.7 / 2.4	1.4 / 0.9
自分専用の勉強机	76.1 / 88.9	15.6 / 5.9	8.2 / 5.2
スポーツ用品	77.7 / 78.0	3.2 / 2.7	19.1 / 19.4
ゲーム機	80.9 / 83.8	8.7 / 4.9	10.4 / 11.3
たいていの友だちが持っているおもちゃ	66.6 / 68.5	12.2 / 7.3	21.2 / 24.2
自転車	95.8 / 91.5	2.4 / 4.1	1.8 / 4.4
おやつやちょっとしたおもちゃを買い小遣い	80.2 / 88.0	11.7 / 7.8	8.2 / 4.2
友だちが着ているのと同じような服	64.7 / 73.0	7.1 / 5.3	28.2 / 21.6
2足以上のサイズのあった靴	89.5 / 91.6	4.4 / 4.5	6.1 / 3.8
携帯電話、スマートフォン	58.2 / 80.1	30.2 / 15.5	11.6 / 4.4
携帯音楽プレイヤーなど	24.7 / 56.9	38.0 / 22.8	37.4 / 20.3

結果と考察

はく奪物への欲求は友人関係を考慮しても自尊感情の低さを予測。サードプレイスによる効果もあり。

- 学年ごとに自尊感情を従属変数とする重回帰分析を実施した(Table 2)。小5と中2に共通して、家庭一人あたりの所得や家計の逼迫度ではなく、はく奪物への欲求の高さが自尊感情の低さを有意に予測した。
→ 実際の家庭の経済状況よりも、子ども自身が感じる“必需品のなさ”に伴う欲求が自尊感情を低めることを示唆
- 小5・中2に共通して、休日に家やサードプレイスのどこかで過ごすことが自尊感情の低さを有意に予測した。また、平日・休日に一人で過ごすことが自尊感情の低さを有意に予測した。
→ 休日に家やサードプレイスで一人で過ごすことは、自尊感情の低さと関連するかもしれない
- 小5・中2に共通して、友人関係の質は自尊感情の高さを有意に予測した。一方で、小5では平日・休日に友人と過ごすことが自尊感情の低さに関わり、支援制度の利用は高さに関わっていた。
→ 友人とただ過ごすだけでは自尊感情が低くなる可能性あり。友人関係の質が重要であり、子ども支援制度も有効
- 小5では、はく奪物の欲求と平日サードプレイスで過ごすことの交互作用が有意(Figure 1)であり、単純傾斜分析でもどちらの線の傾きも有意($\beta=.05-.15, p<.05$)であった。

Table 2 自尊感情を予測する要因の検討(値は標準化偏回帰係数)

	小5 (N=3,509)	中2 (N=3,280)
家庭一人あたりの所得	.03	.01
家計の逼迫度	.00	-.01
性別(男子1, 女子0)	.02	.07 **
はく奪物への欲求	-.10 **	-.11 **
友人関係の質	.46 **	.42 **
平日過ごす場所(家)	-.02	-.01
平日過ごす場所(友人宅)	-.02	-.01
休日過ごす場所(家)	-.07 **	-.07 **
休日過ごす場所(友人宅)	.01	-.02
平日・休日過ごす人(家族)	-.01	-.01
平日・休日過ごす人(友人)	-.07 *	-.06
平日・休日過ごす人(一人)	-.08 **	-.10 **
平日過ごす場所(サードプレイス)	.02	.02
休日過ごす場所(サードプレイス)	-.04 *	-.07 **
子ども支援制度利用	.03 *	.01
はく奪物欲求×平日サード	-.05 **	-.02
はく奪物欲求×休日サード	.01	.01
はく奪物欲求×支援制度	.01	.01
調整済みR ²	.25 **	.22 **

Figure 1 自尊感情に対する交互作用の結果

* $p<.05$, ** $p<.01$

* $p<.05$, ** $p<.01$

